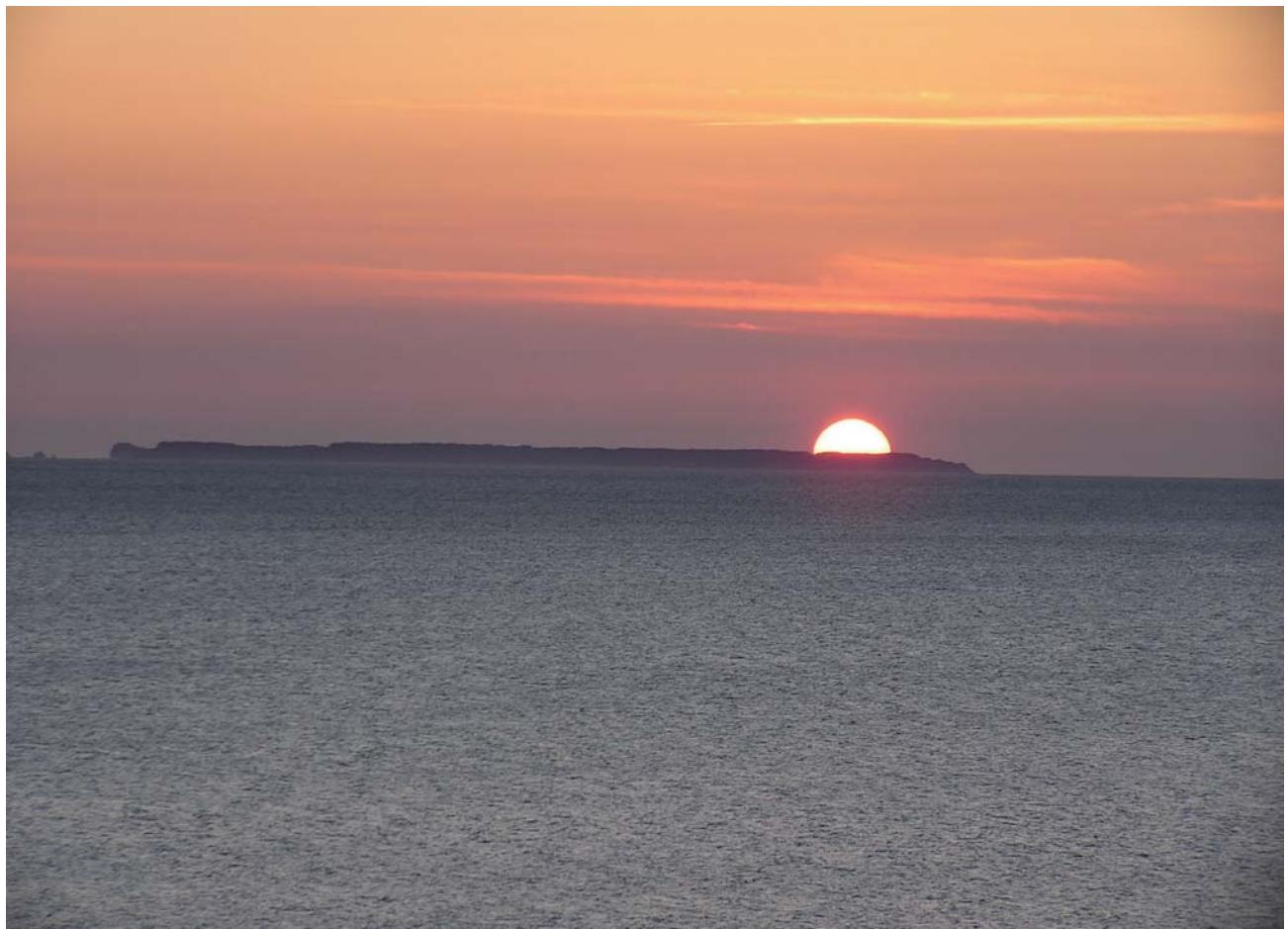


# めでいかすとる *Médicastre*



「三崎公園からの夕陽」

鶴岡地区医師会

26年 **8月号**

鶴岡地区医療学術懇話会抄録

日時：平成26年7月24日(木) 18:45～  
場所：ベルナル鶴岡 4F 「グラスゴー」

## 『アルツハイマー型認知症の診断と治療』

日本海総合病院 精神科  
科長 渋谷 譲 先生

認知症は年々増加傾向にある。厚生労働省研究班が行った調査によると、65歳以上の高齢者の中、認知症の人は推計15%で、2012年時点で約462万人と推計されている。そのようななか、認知症専門医療の提供と介護サービス事業者との連携を担う中核機関として「認知症疾患医療センター（以下疾患センター）」が全国に整備されている。日本海総合病院（以下当院）にも疾患センターが設置されており、平成25年度においては、当院の疾患センターで348名の患者が診断を受けている。その内訳の主なものは、アルツハイマー型認知症（以下AD）：133名、血管性認知症：34名、レビー小体型認知症：13名、前頭側頭葉変性症：4名、混合型認知症：39名、MCI：70名、正常：24名などである。行政や企業などによる認知症疾患に関する啓発活動の影響もあってか、近年は軽症の初診例が増加傾向にある。

ADの診断評価においては、記憶障害を始めとする認知機能と、MRIなどの脳の画像検査が必須と考えられる。但し、65歳未満発症の早発性ADにおいては、MRIにおいて異常を示さない例が少なくないため、注意を要する。また、当院の疾患センターでは、上記検査の他、ADL、BPSD（認知症における心理・行動の障害）の評価も実施し、総合的な評価に努めている。

ADの治療は、中核症状と周辺症状に対するものに分けられる。前者には主に抗認知症薬を用いる。この目的は認知症の進行を遅らせることであり、認知症を治す、あるいは進行を止めることではない。効果に個人差はあるが、基本的には最大用量を目指し、効果不十分なケースや副作用の顕著なケースでは、他剤に変更ないし併用を検討する。後者には抗認知症薬ないし精神薬を使用する。高齢者では薬剤の副作用が生じやすく、忍容性の高いものから慎重に投与する必要がある。BPSDは介護負担を著しく増大させるため、適切な対応が望まれる。

日時：平成26年7月22日(火) 19:00～  
場所：東京第一ホテル鶴岡

## 病院勤務医と医師会との懇談会

勤務医委員会委員長 鈴木 聰

夏の恒例行事となった「病院勤務医と医師会との懇談会」が7月22日東京第一ホテル鶴岡で開催されました。今年で8回目を迎えた会には、病院勤務医18名（莊内病院14名、協立病院4名）と医師会17名の計35名の参加がありました。

三原一郎会長のあいさつに続き、話題提供2題の発表です。最初は、莊内病院感染管理認定看護師の若松由紀子氏から、「疥癬アウトブレイクに対する莊内病院の取り組みと今後の課題」についてで、以下が要旨です。平成25年11月、A入院棟において看護師9名と患者2名が疥癬疑いと診断された。ICTは、有症者に対する疥癬治療と接触感染対策、無症状者に対する皮膚科検診と予防的治療、患者や職員への情報提供を行ったが、12月には退院患者からの発生が増加したため、開業医や施設にも早期発見や情報提供などの協力を依頼した。その結果、2月末に疥癬アウトブレイクは終息した。今後は今まで以上に発症者の早期発見と標準予防策の徹底に取り組んでいくとともに、感染対策に関する地域連携を進めていきたい。

次に慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教授の武林亨先生から「庄内プロジェクトから鶴岡みらい健康調査へ：健康長寿社会のこれから」と題し講演が行われました。超高齢社会への移行とともに、健康・長寿への関心が高まっている。人生80年時代を迎えた現代では、健康と病気に線を引いて完全な状態を目指すことよりも、機能の低下ともつきあいつつ地域で幸せに暮らすことがより大切になってきている。そのことを形にしたのが庄内プロジェクトであり、地域の人々のニーズを実感することのできた貴重な機会であった。鶴岡みらい健康調査も、同様の視点で新たな地域の健康づくりを目指すプロジェクトである。慶應先端研が開発したメタボローム解析技術と、からだ館を中心とした地域コミュニティへのつながりを組み合わせ、「鶴岡のみらいに健康の贈り物を」を合言葉に、先端科学を地域の健康につなげる取り組みを続けていく計画であり、地区医師会、病院の皆さんとも密接につながりながら、これを進めていきたい。

その後は協立病院院长の堀内隆三先生の乾杯の音頭で懇親会がスタート。莊内病院、協立病院のみなさんからそれぞれスピーチもいただき終始和やかな雰囲気の中で情報交換がなされ、最後は鈴木伸男先生の張りのある中締めのご発声で閉会となりました。本会は病院勤務医と医師会との連携を模索する絶好の場であるにも関わらず、近年参加者数が伸び悩んでいます。今後の会のあり方についての検討も必要で、会員の皆様方のご意見を頂戴したいところです。



# マイペット＆マイホビー

— 第90回 —

## サッカー日本代表がW杯で優勝する夢

自分の趣味は、サッカー観戦で一番のストレス発散法です。自分はサッカー日本代表のイチ・サポーターだと勝手に自負しています。そこで、今回はサッカー日本代表のエッセイを書かせていただきたいと思います。

“ドーハの悲劇”から考えると、今のサッカー日本代表の躍進は夢のようであり、隔世の感を覚えます。“ドーハの悲劇”当時は日本がW-cupに出場するなんて夢物語だった訳ですから、今から見ればウソみたいです。21年前の1993年に“Jリーグ”というプロ・リーグが発足し、急速に日本サッカーが発展していきました。カズ（＝三浦知良）が初のイタリア・セリエAの門をたたき、バイオニアとなり、中田英寿が、セリアAのペルージャとASローマで大活躍し、ヨーロッパ中にサッカー後進国の日本にも世界標準レベルの選手がいるんだと初めて知らしめました。その後、中田の後を追って小野伸二、稻本潤一、中村俊輔、高原直泰らがヨーロッパに渡り、これが、“第1次ヨーロッパ進出ブーム”と呼ばれています。その後は、現在に至るまでドイツのブンデスリーガを中心にヨーロッパで大勢の日本人選手が活躍しています。（今は、“第2次ブーム”です。）やはり、先人達が荒野の道を切り開いてくれたからこそ、後から来る人達は道を歩く事ができるのだと、つくづく思います。

それから、W-cupでの歴史を振り返ってみると、日本代表には、苦難の連続がありました。オフト・ジャパンの“ドーハの悲劇”があったからこそ“ジョホールバルの歓喜”につながり、日本は初めてのW-cup（＝1998年フランスW-cup）に出場する事が

島眼科医院 片桐 哲郎



ドーハの悲劇

できたんです。そのフランスW-cupで第1次岡田ジャパンが3戦全敗した悔しさがあったからこそ、2002年日韓W-cupでは、トルシエ・ジャパンが初めてのベスト16に進出できた訳です。又、2006年ドイツW-cupで、ジーコ・ジャパンがオーストラリアに1-0で勝っていたのに、残り6分から3失点して屈辱の逆転負けを喫した悔しさ（＝カイザースラウテルンの悲劇）があったからこそ、2010年南アフリカW-cupでは、第2次岡田ジャパンがアウェー初のベスト16に進出できた訳です。このようにして日本は、失敗を糧として一段一段、階段を登るように強く、たくましく進化してきたと言えます。

先日、閉幕したばかりのサッカーW-cupブラジル大会では、みなさんもご存知の通り、期待のザック・ジャパンは、1分2敗と惨敗し、グループリーグ最下位に沈んでしまいました。大会が始まる前は、本田圭佑（ACミラン）、香川真司（マンチェスターU）、長友佑都（インテル・ミラノ）など、海外の“真のビッグ・クラブ”でプレーする選手が出て来

て、メンツ的には“史上最強の日本代表”との呼び声が高く、かつてない程の日本中の期待値が高かったため、非情な現実をつきつけられた時の落胆は計り知れないものがありました。3試合を冷静に振り返るなら初戦のコートジボアール戦の敗北が全てを決めてしまったと思います。前半、本田のスーパー・ゴールで先制したものの、エースのドログバが投入されるやいなや相手チームに一気に攻撃のスイッチが入り、左サイドからフリーでセンターリングを上げられてヘッドで決められ、全く同じパターンで2分後にも得点を許し、いわゆる“魔の2分間”になってしまいました。こうして一度狂った歯車は元に戻せず、“負のスパイラル”に陥り、その後ギリシャ戦では、退場者を出し、一人少ない相手に対して0-0で痛恨の引き分け、最後のコロンビア戦では、後半切れ味鋭いカウンターの餌食になり、1-4で無残に散りました。やはり、このチームに潜んでいた根本

的な課題は、相手に長所を消された途端、自分達の戦いができなくなってしまう事です。W-cupで戦う以上、対戦国から研究されるのは当たり前で、香川選手と長友選手が揃う左サイドで起点を作らせてもらえなかったり、本田選手にマークが集中するのは十分予想できた事です。アジアでは通用しても世界では通用しません。結果論ですが、日本はそこを追及し切れていたかったんです。要は、長所を消されても対等に戦える術を持つべきだったと思います。今回のW-cupに関しては少し“ぼやき”が長くなってしまい、申し訳ありませんでした。

最後に、これはあくまで“自分の夢”なのですが、自分が死ぬまでに(=生きている間に)サッカー日本代表の“サムライ・ブルー”的選手達が誇らしげに満面の笑みでW-cupの優勝トロフィーをかかげる光景を目にしたいと切に願っています！！！



## 第23回 医師会納涼ビアパーティー

日時：平成26年8月1日(金) 19:00～  
場所：グランド エル・サン

去る8月1日(金)、第23回医師会納涼ビアパーティーがグランドエル・サンを会場に参加者308名で開催されました。

ビアパーティー初の男性職員2名の司会進行で、福原先生の開会挨拶を皮切りに、三原会長の挨拶、鈴木聰先生の乾杯で宴がスタートしました。

恒例の新人余興は、健康管理センター・医師会館の職員で始まり、みずばしょう、湯田川リハ病院の順に、少人数でしたが先輩職員の協力もあり、迫力のあるパフォーマンスで大いに盛り上りました。その後の大抽選会は新企画として、欲しい物に投票して抽選することにしたため、自分の投票した景品が出てくると大きな歓声が上がり、また、外れた時のため息も大きく感じました。毎年のことですが、景品をもらうことができた方々の憎らしいほどの笑顔が印象的でした。今年のフィナーレでは『愛は勝つ』の合唱を大抽選会当選者にお願いしましたが、快く歌って頂き盛り上がりも大きく感じました。

最後に土田先生の閉会挨拶で閉宴となりましたが、年1回、全職員が一度に交流できる機会になりますので、来年もたくさんの方から出席いただき、楽しんでいただければと思います。

実行委員長 石塚 満





医師会納涼ビアパーティーという先生方や大勢の職員が参加する中で新人職員が余興をする機会をいただきありがとうございました。

それぞれに配属になった新人職員が職場ごと一緒に合わせて練習することがなかなか難しく、どのような余興にするかみんなで話し合った後、各職場で昼休みや夕方の時間を利用し、1ヶ月程度練習してきました。

当日、初めてのお披露目にどうなることやら不安もありましたが、会場の方々からおおいに盛り上げていただきなんとかみんなで力を合わせ楽しく終えることが出来ました。

これからも新人職員一同、精一杯頑張っていきますのでどうぞよろしくお願ひします。

最後になりましたが、実行委員のみなさまお疲れ様でした。

在宅サービスセンター訪問看護ステーション ハローナース  
菅原 由美



## みづばしょう夏祭り

日時：平成26年7月26日(土)  
場所：介護老人保健施設みづばしょう

7月26日(土)に、みづばしょうの恒例行事となりました夏祭りを開催いたしました。今年は、みづばしょうの開所から10年目という節目の年であり、準備の段階から記念となるようなものにしたいと企画してまいりました。

当日は幸いにも天候に恵まれて、午前中から気温が上がり、鶴岡市では観測史上最高気温を記録したそうですが、ご利用者さんやご家族の方、地域住民の皆様、会員の先生方や職員の方々より大勢ご参加いただきました。

羽黒太鼓こどもクラブの皆様、柏樹会の皆様、念珠関辨天太鼓創成会の皆様からは、迫力ある演奏・踊りを披露していただき、本当にありがとうございました。また、職員によるラインダンスや踊り、太鼓を披露させていただきましたが、練習の成果を出せたのではないかでしょうか。

祭りのフィナーレを飾る花火も記念となるよう趣向を凝らしましたが、楽しんでいただけましたでしょうか？きっと感動していただけたものと思います。

これからも参加される全ての方が楽しめるような夏祭りにしていきたいと思いますので、ご支援・ご協力のほどよろしくお願ひ致します。

最後に、ご協賛をいただきました皆様、お手伝いに来てくださった皆様に改めて御礼申し上げます。

総務会計課課長代理 難波 崇



故 齋藤 俊弘 先生のご冥福をお祈り申し上げます。

平成26年6月26日ご逝去 満91歳

## 50の手習い わたしのお気に入り

人生80年時代を迎え、昔の人より長生きできるようになり、「50歳を過ぎたら人生を自分のために生きるべし」という五木寛之の「林住期（りんじゅうき）」の教えに従い、職員の福利厚生のためになるとのことで、あるスポーツクラブの法人会員になった。事務長である家内は以前からヨガやジムに通い、既に運動に励んでいた。中々運動出来ないでいる私を尻目に、スポーツクラブでヨガやダンス・ゲルマニウム温浴を楽しみ、健康体への歩みを更に加速させた。

学生時代私はジャズバンド部に属し、トランペット（ラッパ）を吹いていた。硬派な部で文化系でありながら、“のり”は体育会系であった。日々の練習もさることながら、夏休みは3回合宿があり、上下関係は絶対であった。しかし酒飲みとラッパは上達したもの、決して健康的な生活ではなく、学祭で肝エコーをやってもらった際、既に脂肪肝の烙印を押され、先輩から「若い身空で…」と言われていた。

開業してから私のウエストは85cm前後を彷徨い、健診時も何度か計り直してもらって数ミリ差でメタボを免れていた。血圧も同様で特に拡張期血圧が高く、何度か測り直してこれも軽度高血圧にならずにすんでいた。

今回運動しようと思い立ったが、私はゴルフは性に合わないので大学の一年時、山梨県富士吉田での全寮生時代に、たまたま部の練習のない日に暇つぶしでやった経験のあった硬式テニスを選んだ。

何事も目標が定まらないとやらないタイプなので、2つ目標を定めてみた。それと競争原理を働かせるため、事務長との密かな競争を思い立ち、家内に知られず減量して、あっと言わせてやろうと思いついた。が、まもなくばれてしまい公開競争になってしまったのは誤算だった。

1. お腹が満腹になっても60kg以下の体重を維持すること。もしくは、BMI 22.0（この数値に近いほど統計的に「病気にかかりにくい体型」と疫学調査で判明）を目指し、キープすること
2. テニスの大会に出て、勝てるようになること

1. の目標に向かってはカロリーを1400kcal位に制限中。カロリーを意識する前は恐らく、この2倍のカロリーを摂取していたと思う。とにかくご飯が大好きで、朝食か昼食どちらかと夕食でご飯3杯は食べ、朝からステーキOK、夕ご飯がカレーライスとなれば大盛り2杯は食べていた。もちろん、アルコールは種類を問わずがぶ飲みだったが、現在は飲み会の時だけにしている。

2. の目標に対しては、現在鋭意レッスン中だが中々道のりは険しそう。今のところ1時間弱、週2回の練習時間だが、もっともっと練習時間を増やそうと画策中。

現在、6月初めに65.3kgあった体重は、59kg代前後に落ち着き、BMIは22.4。首のまわりがすっきりしたという肯定的な評価がある反面、貫禄が無くなったり・小さくなったり・薄くなったり・かちよペねぐなったと言う否定的な評価もあり複雑な心境である。

さて、今後貫禄を選ぶか健康を選ぶか…。

(阿部 周市)



## 表紙

## 「三崎公園からの夕陽」

三浦 二三夫

8月中旬から下旬にかけての三崎公園の展望台では飛島にかかる夕陽が見られます。三崎公園の展望台は山形県側、秋田県側の二か所あり、写真は秋田県側の展望台から撮ったものです。夏至の頃は飛島のはるか北側に没するのですが、日ごとに夕陽は南下し飛島と重なるのです。庄内の夕陽スポットは数多くありますが、お勧めの一か所だと思います。

## 編集後記

いよいよ夏到来、ビールのおいしい季節です。個人的には夏が一番すきです。

生き物すべてが活発に活動して、生命に満ち溢れている夏いいですねえ。趣味のひとつにフィッシングがありますが、夏の夜空を見ながらする夜釣りは至福のひとときです。{ただしブヨ対策はしっかりしないとひどい目にあいます。}

7月26日みずばしょう夏祭りがおこなわれ、大変盛り上がったようです。一度は行ってみようと張り切っていたのですが、分娩のため参加できませんでした。このことはとても残念だったのですが、その日の昼に竹中平蔵氏の講演会があり、その講演を聞くことができました。日本経済の動向については、アベノミクスに関して詳しく説明していただき、自分がよく理解していないことも多々あることに気づかされ大変勉強になりました。さらにその後、竹中平蔵氏と慶應義塾大学先端生命科学研究所所長富田勝氏及びバイオベンチャー企業スパイバー社長関山和秀氏の3者による「鶴岡が日本のためにできること」と称したパネル対談では、「地方」というブランドの確立が大事で、すべて東京中心という概念を打ち破り、地方で成功することが不可欠との事でした。それを証明してくれたのが富田所長で、就任当初まわりの同僚から田舎の鶴岡に行っても絶対成功なんかしないと言われたのに対し発奮、世界を驚かすメタボローム解析技術を開発いろいろな分野に貢献しつつあります。また富田所長を慕って鶴岡にきた関山氏も世界初の人工クモ繊維を作成し、量産体制を整えていて有望なベンチャー企業になっています。この2人に引き込まれるように関連する人々が庄内地方に流入してきています。今問題になっている地方経済と人口減少、補助金や子育て支援ぐらいでは到底解決できるものではありません。その意味で庄内は、この天才的2人によって、いい意味で大きく変わってゆく予感がしました。

(斎藤 高志)

編集委員：三浦 道治・福原 晶子・三科 武・斎藤 高志・中村 秀幸・伊藤 茂彦

発行所：一般社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

ホームページにも掲載しております [鶴岡地区医師会](http://www.tsuruoka-med.jp) 検索 URL http://www.tsuruoka-med.jp